



町民文芸

只見短歌会

十二月詠草

大塚栄一

指導

古川 英子

九十七歳の母の手紙が届きたり除雪の夫を声あげて呼ぶ

齊藤ちひろ

ずっしりと雪の重みに耐へてゐる松の緑を見つめ佇む

吉津 政枝

年重ね賀状書く数減りゆきて師走のひと日寂しさ過ぎる

渡部ゆき子

再三の出品請はれ協力し白菜出せば賞を受けたたり

五十嵐英子

施設より妹の家に外泊し困む年越しの夕餉賑はふ

目黒 富子

冬期間帰省するなど言ひつつも娘の分仕込み歳晩迎ふ

皆川 恒子

正月に搗きたる餅を曾孫らは焼きてと言ひて搗きたて食ます

五十嵐夏美

押入れの隙間を齧る鼠ゐて猫の鳴き声真似れど止めず

渡部ヨリ子

茶籠筭の引戸を開けて笑ひつつ小さき手にて孫いたづらす

新国 洋子

有名な歌手の名夫もわれも忘れもどかしみつつ認知と笑ふ

只見俳句会

新年句会

目黒十一

指導

修 一

初雪の浅草岳がど真ん中

蒼穹や破魔矢いただく輪王寺

雪囲終えたる村の佇まい

嚏する口を隠せり年賀状

又壺歩

初雪や摘み残したる菜の青く

贈りもの小振りとなりし師走かな

瀬戸物の触れ合う音や十二月

トナカイの鈴の音遠し冬北斗

吉 児

木枯や筑後の空の力士旗

上木の仕分け作業や年つまる

農守り老守るくらし障子張る

月凍つる村の眠りの深さかな

邦 夫

元兵の天突き運動息白し

湯豆腐の浮くやゆっくり箸を割る

笑 羊

電光の飾りに潜む寒さかな

一 燈

冬桜花のやさしく咲きにけり

数え日や良き出来事で終りたし

踏み出でて雪の深さを知らざる

降る雪や窓越しに見る庭木立

一 穂

傘に積む雪振り払う停留所

門松の立つや甘酒熱くして

年明けやこの星空の田も畑も

海風や房総の空凧上がる

洋 子

冬温し二人ならびて厨事

村の湯の少し温めの冬至の日

朝寒や学童の列足早に

丹念に道具洗って農收む

敦 子

ストックの匂いこめたる冬の居間

日当たりていつしか雪は軒に無く

くろき雲しろき雲脚冬満月

踏みしむる雪の深さや月明り

礼 子